

3 北九州市

3.1 プラットフォーム設立前の取組団体の状況

3.1.1 これまでの取組

北九州市では、2005 年から 2007 年にかけて孤独死が相次いだことをきっかけとして、2008 年に「いのちをつなぐネットワーク事業」を開始した。「地域での見守り・支援体制」を充実・強化するため、及び市民と行政と一緒に地域福祉の面からの地域づくりを推進するため、福祉部門の司令塔機能を担う存在として、制度を担当しない「いのちをつなぐネットワーク担当係長」を各区役所に配置することにより、当該事業を強力に推進している。

これにより、行政のみならず、民間団体も含めたネットワークを基盤に、「見つける」「つなげる」「見守る」をキーワードとして、地域住民が社会的に孤立することなく、支援が必要な人には福祉サービスにつなげることができるよう、地域全体で見守る仕組みづくりを推進している。

従前よりこうした孤独・孤立対策に資する取組を進める一方で、孤独・孤立対策をさらに推進する観点から、北九州市内の NPO 法人等 15 団体を参加団体とする「北九州市孤独・孤立対策等連携協議会」（以下「連携協議会」という）を令和 4 年 2 月に設立し、令和 4 年度の「地方版官民連携プラットフォーム事業」では、参加団体の連携を促進するための取組みを実施した。

3.1.2 孤独・孤立対策に取り組むことになったきっかけ、理由

「孤独・孤立対策の重点計画」（令和 4 年 12 月最終改訂）において指摘されており、職場内・家庭内・地域内において人々が関わり合い、支え合う機会が減少し、生きづらさや孤独・孤立を感じざるを得ない状況となる人々が生まれている。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を契機として、交流・見守りの場、相談支援を受ける機会の喪失など、孤独・孤立の問題が顕在化したところ、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が収束した後も、この傾向が継続することを予想している。とりわけ、北九州市は政令指定都市の中で高齢化率が最も高くなっており、今後も他都市に先駆けて孤独・孤立の問題が深刻化していくことが懸念される。

こうした問題意識のもと、NPO 法人等の孤独・孤立支援団体の取組に関する情報共有や、団体間の連携や支援方法についての意見交換、人材育成や研修等に関する協議を行う等、支援者同士がつながり、連携を深め、支援活動の輪を広げていくことが重要であると認識し、令和 4 年 2 月に連携協議会を設立した。

令和 4 年度事業を通じて積み上げた孤独・孤立対策に係る様々な経験・知見をベースとし、北九州市における孤独・孤立対策を更に推進するとともに、全国の自治体が今後孤独・孤立対策を進めるにあたり、北九州市の取組が他自治体の取組の参考として活用されることも期待し、令和 5 年度においても引き続き本事業を活用することとした。

3.2 プラットフォーム設立に向けた取組

3.2.1 プラットフォーム設置により何を実現/解決したかったか

孤独・孤立対策を推進するためには、

- 行政や民間団体の縦割りの解消と横ぐしが必要
- 支援が途切れないようつなぐ・つなげる仕組みづくりが必要
- 支援者同士の顔の見える関係づくりが重要

との考えのもと、

- 各団体の取組みについての情報共有
- 団体間の連携や支援方法について意見交換
- 人材育成や研修等に関する協議

などを実施するため、連携協議会を令和4年2月に設置をした。

連携協議会の設立から1年が経過し、今後も息の長い継続的な取組が必要であるとの認識を持っていたが、連携協議会の活動や方向性に対する考えや期待感に差異がある中でも、連携協議会の活動を持続・継続させるためには、行政から一方的な押し付けではなく、連携協議会が自発的に自走していくべきであるとの課題意識を持った。

このため、連携協議会の自発的な自走を促す取組として、行政が担ってきた事務局機能を連携協議会の参加団体への試行的移行を検討し、その実現性や効果検証を実施することを令和5年度事業における重要取組として位置付けた。

3.2.2 プラットフォームの体制

北九州市内で活動するNPO法人等15団体の参加を得て、令和4年2月に連携協議会を設立した。ホームレス支援、子ども食堂、障がい者支援、高齢者支援等の様々な分野で活動するNPO法人等が参加しており、支援の輪を広げるために今後も参加団体を増加させ、5年後には30団体の参加を得ることを目指している。

設立前のNPO法人等へのヒアリングの中では、

- 官民ともに縦割りの解消すること
- 支援をつなぐ仕組みを構築すること
- 支援者同士が顔の見える関係性を構築すること

を機能として備える組織が既存の組織では不足していることが確認され、これらの機能を備える新たな組織を設立することとなった。

令和5年度事業においては、行政が担ってきた事務局機能を連携協議会の参加団体への試行的移行を検討し、連携協議会活動の企画・運営機能を北九州市社会福祉協議会（以下「社会福祉協議会」という）に試行的に委託した。社会福祉協議会の持つネットワークや知見を活かした事業を北九州市と協働で実施することにより、北九州市だけで対応した場合と比較して成果が2倍、3倍と膨らむことを目指した。社会福祉協議会が企画・運営した事業は、連携協議会の参加団体から好評であり、北九州市も社会福祉

協議会も本年度の試行的移行について、前向きな評価を行っている（詳細は2.3.3 参照）

■ 官民連携プラットフォーム組織図イメージ

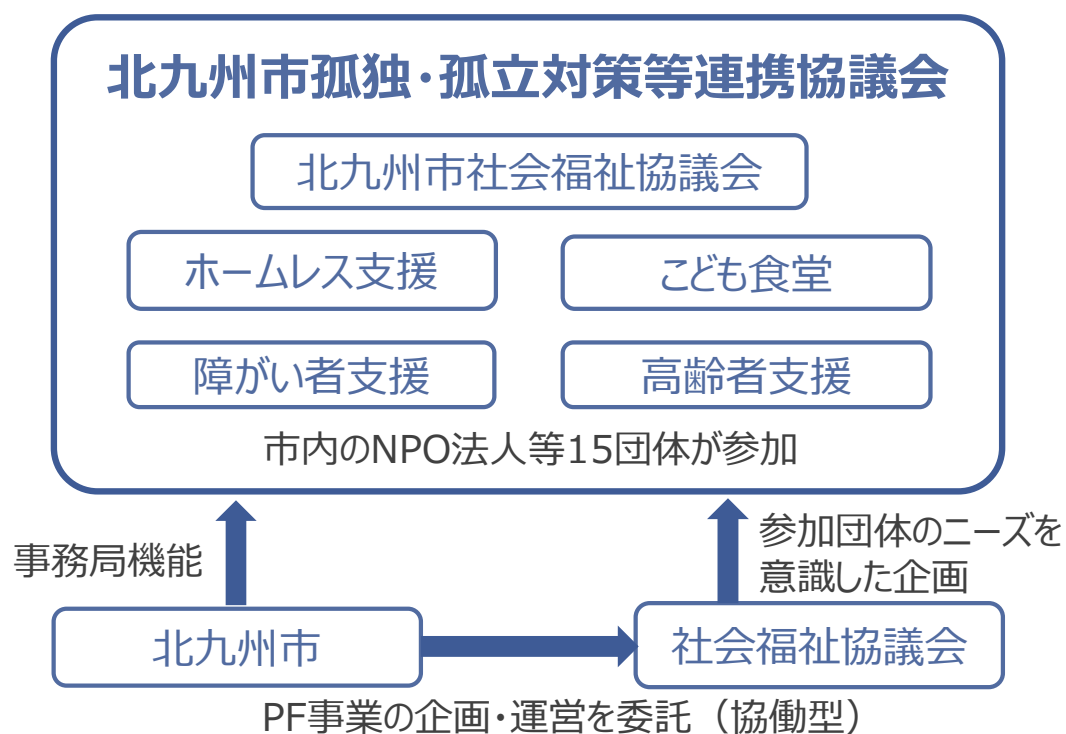


図 3 - 1 連携協議会組織図イメージ

3.2.3 プラットフォームでの協議事項

令和4年2月の設立から令和6年3月までに合計6回の連携協議会を開催した。各回における議題は次のとおりである。

表 3 - 1 連携協議会開催実績

日 付		議 題
R4.2.18	第一回連携協議会	(1) 各団体参加者から自己紹介 (2) 行政から当協議会についての説明 (3) 意見交換
R4.6.30	第二回連携協議会	(1) 行政からの説明 ・団体の活動紹介冊子の作成、配布について ・生活困窮者に取り組む団体等支援事業について ・その他 (2) 意見交換
R4.12.13	第三回連携協議会	(1) 行政からの説明 ・地方版孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム推進事業について ・「北九州市版 お悩みハンドブック」の公開について (2) ケーススタディ テーマ：「男性介護者の孤独・孤立」
R5.3.28	第四回連携協議会	(1) 地方版孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム推進事業の実施結果について (2) 事例を通じた相互理解・連携推進 ・非行少年立ち直り支援について ・ケーススタディ ～困難を抱える若者の支援～
R5.7.19	第五回連携協議会	(1) 内閣官房 地方版孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム推進事業について (2) 北九州市孤独・孤立対策等連携協議会 今後の方向性について (3) 重層的支援体制整備事業への移行準備事業について
R5.12.14	第六回連携協議会	(1) 認定 NPO 法人抱樸 視察 (2) 大谷市民センター 健康サロン 視察 (3) 認定 NPO 法人フードバンク北九州ライフアゲインツキダテラス視察 (4) ウェルとばた内施設 視察 ・北九州市子ども・若者応援センター「YELL」 ・北九州市障害者基幹相談支援センター ・北九州市ひきこもり地域支援センター「すてっぷ」 ・社会福祉法人北九州市社会福祉協議会 (5) コミュニティコーピング

3.2.4 プラットフォーム形成に向けて工夫した点、苦労した点

設立にあたっては、福祉や教育といった孤独・孤立に関連する分野の所管部署からつながりのある NPO 法人等の情報提供を受け、参加団体の選定が行われた。参加団体の動きやすさを重視し、15 団体で活動をスタートしているが、今後参加団体数の増加を目指している。一方で、むやみに組織が拡大して破綻してしまうことを懸念し、参加団体同士が互いを把握することができるスピード感で参加団体を増やしていくよう、参加団体からは求められている。

令和 5 年度事業においては、連携協議会の活動や方向性に対する考えや期待感に差異がある中でも、連携協議会の活動を持続・継続させるためには、行政から一方的な押し付けではなく、連携協議会が自発的に自走していくべきであるとの課題意識を持ったことから、連携協議会の自発的な自走を促す取組として、行政が担ってきた事務局機能を連携協議会の参加団体への試行的移行を検討し、その実現性や効果検証を実施することを令和 5 年度事業における重要取組として位置付けた。（詳細は 3.3.3 参照）

3.3 プラットフォーム形成後（形成途中）の取組

3.3.1 プラットフォーム関係者の認識・課題意識の共有はどのように行ったか

北九州市における庁内連携としては、令和4年7月に孤独・孤立対策推進のための庁内関係課長連携会議（8局12課）を発足し、孤独・孤立対策に関する情報共有や意見交換が行われることにより、市役所全体として総合的かつ効率的な孤独・孤立対策が検討・推進することが図られている。

連携協議会では、参加団体間がフラットな横の関係を築くことができるよう、会長や座長を置かない組織となっており、参加団体間で相談しやすい組織を形成することを意図している。また、令和5年度事業では、参加団体の実際の支援現場を視察、体験するバスツアー等、参加団体間の連携強化を図る事業が実施された。

3.3.2 孤独・孤立対策に関する住民への周知・意識付けをどのように行ったか

簡単な質問に答えるだけで悩みの軽減や解決に役立つ情報を簡単に集めることができるウェブサイトとして、「北九州市版 お悩みハンドブック」を令和4年度事業において作成した。令和5年度事業においては、利用者のニーズを踏まえた取組が措置できるよう、利用者数のアクセス分析を可能とする機能改善を行った。

また、孤独・孤立の問題を自分事として捉え、この問題に対する正しい理解の促進を図るためのノベルティを作成し、いのちをつなぐネットワーク推進会議及び連携協議会において関係団体に配布を行ったほか、食糧支援を行う団体を通じて市民への配布を行った。



図 3 - 2 配布したノベルティ

3.3.3 団体内の孤独・孤立対策を充実させるための事業で何を優先させたか 令和5年度実施事業は次のとおりである。

表 3 - 2 実施事業一覧

事業名称	事業内容	目的・期待される効果	実施時期	発注先(予算配分)
北九州市孤独・孤立対策等連携協議会事務局機能の移行に関する検証	孤独・孤立協議会の事務局機能の移行に関する可否や、移行する場合の範囲、方法等について成果をまとめる。	協議会事務局機能の移行	—	NTTデータ経営研究所(500,000)
支援現場見学バスツアー	実際の支援現場を視察・体験するバスツアーを行い、各団体の取り組みを可視化することで、真の顔の見える関係づくり・信頼づくりを構築し、各団体間での相談者の適切なつなぎや参加団体同士の連携強化を図る。	参加団体の連携強化	2023.12.14	北九州市社会福祉協議会(1,158,120)
支援者向け能力向上研修会	孤独・孤立に係る相談支援に当たる人材向けの研修会を実施する。(協議会参加団体に限定しない)	支援者の能力向上	2024.2.5 2024.2.6	北九州市社会福祉協議会(844,340)
支援団体紹介動画作成等	子どもから大人まで、悩みを抱える人が安心して支援団体等とつながることができる環境創出のため、孤独・孤立に関する普及啓発動画を作成する。	参加団体の活動普及	—	北九州市社会福祉協議会(1,375,220)
孤独・孤立ノベルティ作成	孤独・孤立の問題を自分事として捉え、この問題に対する正しい理解の促進を図るため、市民等に配布するノベルティを作成する。	孤独・孤立対策の普及・啓発	—	株式会社成田屋(465,000)
人材確保・育成のためのケーススタディ	協議会参加団体の連携強化、支援の質の向上につなげるため、行政や団体が抱える困難ケースについてケーススタディを開催する。(2023.12は支援現場見学バスツアーとして実施。2024.3は検討中)	参加団体の連携強化、能力向上	2023.12、 2024.3	北九州市社会福祉協議会(0)
いのちをつなぐネットワーク推進会議	行政、民間企業・団体等の連携のもと、支援を必要としている市民が社会的に孤立することのないように、地域全体で見守り、必要な行政サービス等につなげていくことを目的とした「北九州市いのちをつなぐネットワーク推進会議」の実施。	孤独・孤立対策の普及・啓発	2023.11.14	株式会社コムディア(848,200)
包括的な支援体制の構築に向けた支援者向け研修会	複雑化・複合化した困難を抱える人を支援するため、属性を問わない包括的な支援体制の構築を行うための研修会の企画・運営。	包括的な支援体制整備	2024.1.19	株式会社アソウ・ヒューマニセンター(908,600)
「北九州市版お悩みハンドブック」機能改善	「北九州市版 お悩みハンドブック」の、利用者数などのアクセス分析を行うことができるよう機能の改善を行う。	孤独・孤立対策の普及・啓発	—	株式会社グラフィアー(1,000,000)
			計	(7,099,480)

前述のとおり、令和5年度事業においては、連携協議会の活動や方向性に対する考えや期待感に差異がある中でも、連携協議会の活動を持続・継続させるためには、行政から一方的な押し付けではなく、連携協議会が自発的に自走していくべきであるとの課題意識を持ったことから、連携協議会の自発的な自走を促す取組として、行政が担ってきた事務局機能を連携協議会の参加団体への試行的移行を検討し、その実現性や効果検証を実施することを令和5年度事業における重要取組として位置付けた。当該取組の詳細は以下のとおりである。

【北九州市孤独・孤立対策等連携協議会事務局機能の移行】

○ 問題意識

支援の輪を拡大していくため、今後連携協議会の参加団体の増加を目指しているが、さらに孤独・孤立対策の取組を進展させるためには、より幅広いステークホルダーを迎え入れ、かつ彼らが継続的に参加することに意義を創出することが必要である。

また、連携協議会活動の持続性・継続性も重要な観点の一つである。連携協議会の活動や方向性に対する考えや期待感に参加団体間で差異がある中、連携協議会に参加す

ることの意義を見出すことが出来なければ、途中で離脱する団体が生じることも懸念されるところ、よりの確に参加団体のニーズをつかみ、連携協議会の事業を展開していくことが必要である。

連携協議会の事務局を担う北九州市も様々な業務を抱える中で、孤独・孤立対策を今後維持、発展させていくためには、行政からの押し付けではなく、連携協議会が自発的・自走的に活動を行いながら、孤独・孤立対策の取組を持続・継続させていくことが必要である。

○ 社会福祉協議会との協働体制の強化

上記のような問題意識を抱える中、連携協議会の事務局機能のうち、実施事業の企画・運営を社会福祉協議会へ移行することを検討した。社会福祉協議会は、長年に渡ってみんなが安心して暮らせる支え合いのまちづくりを目指して活動しており、孤独・孤立対策とも親和性の高い地域福祉活動について多くの知見を有している。また、連携協議会の参加団体とのコミュニケーションも日常的に行っており、参加団体の連携協議会に対するニーズ把握も行いやすく、連携協議会活動の質の向上が期待できた。

これらの特性を踏まえ、連携協議会事業の企画・運営の社会福祉協議会への委託を試行的に実施し、社会福祉協議会の持つネットワークや知見を活かすことにより、参加団体のニーズを意識した事業の企画・運営を目指した。ただし、単純な委託ではなく、北九州市と社会福祉協議会が共に考え、進める協働型の委託とすることにより、北九州市だけで対応した場合と比較して成果が2倍、3倍と膨らむことを目指した。

○ 実施事業

参加団体間で何をしているのかが分かりにくいという問題意識から企画した支援現場見学バスツアーや、広く支援団体の活動を知ってもらうための動画作成等、連携協議会の活動をより有機的に結合させる取組について、社会福祉協議会の企画・運営のもと、強力に推進した。

また、連携協議会の参加団体以外の方も含めて実施した「支援者向け能力向上研修会」は、将来的な参加団体構成員の支援者能力向上だけでなく、孤独・孤立対策等連携協議会の拡大も念頭に置いた取組となっている。

社会福祉協議会による企画・運営事業の一覧は次のとおりである。

表 3 - 3 社会福祉協議会による企画・運営事業一覧

事業名称	目的・期待される効果
支援団体間の連携による試行的事業	参加団体の連携強化
人材確保・育成を目指す研修	支援者の能力向上、支援者同士の連携強化
孤独・孤立に関する普及活動	孤独・孤立の問題に関する啓発

・ 支援団体間の連携による試行的事業

参加者数：23 名（連携協議会参加団体より参加）

連携協議会の参加団体の支援現場を視察・体験するバスツアーを行い、各団体の取組を可視化することにより、真の顔の見える関係づくり・信頼づくりを行い、各団体間での相談者の適切なつなぎや参加団体間同氏の連携強化を図った。

表 3－4 支援団体間の連携による試行的事業 プログラム

時間	プログラム
9：00	集合
9：30	NPO 法人抱樸「抱樸 館視察」 施設、支援内容の説明のほか、シェルター等の普段見ることのできない施設内まで見学した。
10：30	大谷第二地区社会福祉協議会「健康サロン視察」 大谷第二地区社会福祉協議会が定期的で開催している健康サロンを視察。支える・支えられるの垣根を外し、誰もが気軽に参加できる地域の居場所を見学し、地域コーディネーターの役割について説明。
11：30	NPO 法人フードバンク北九州ライフアゲイン「ツキダテラス視察」 食料配布や地域食堂の事業を通して、地域の居場所として施設を開放しており、実際の活動の様子の見学と同施設に届けられた食料品の箱詰めを体験。
12：30	昼食
14：00	北九州市子ども・若者応援センターYELL、北九州市障害者基幹相談支援センター、北九州市引きこもり地域支援センターすてっぷ、北九州市社会福祉協議会（4 団体）「各施設視察」 福祉複合施設である「ウェルとばた」内に事業所を置く 4 団体を視察。スムーズな支援のつなぎができるよう、実際の相談ブースの見学や相談員との顔合わせ等を行った。
15：00	超高齢社会体験ゲーム「コミュニティコーピング」 講師：一般社団法人コレカラ・サポート 代表理事 千葉 晃一 氏 孤独・孤立対策を地域住民と専門性のある多職種が連携して解決していくことをゲームを通じて体験し、多様な主体で協力・連携することの重要性を理解した。
17：00	閉会



● 大型バスで各施設を移動



● NPO法人抱樸での視察



● 健康サロン見学の様子



● NPO法人フードバンク北九州ライフアゲインにて、食品の箱詰め作業を実施



● 各団体の活動内容についての説明



● 超高齢化社会を体験するボードゲームを実施

図 3 - 3 支援団体間の連携による試行的事業の様子

各団体の視察についての感想のアンケートを実施したところ（回答者 18 名）、非常に有意義であったとの回答が太宗を占め、参加者全体としても有意義に感じることができる事業となった。

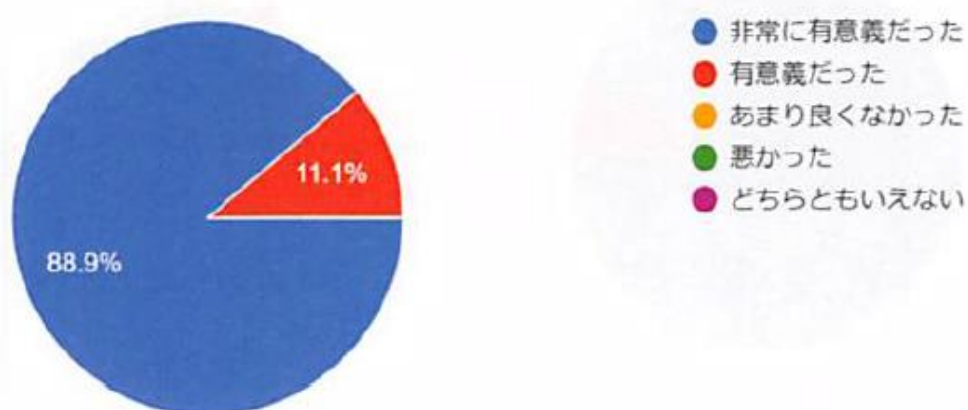


図 3 - 4 アンケート結果「各団体の視察はいかがでしたか？」

参加者が有意義であったと回答した理由として以下のような回答があった。普段知ることのできない他団体の実際の活動を知ることができたこと、これまではあまり会話することが無かった団体との連携のきっかけになったこと等が挙げられている。

- ・ 実際目で見て現場を知るのはとても良い機会でした。ツキダテラスでの箱詰めなども、こういう風に活動されているのだと体感しました。昼食や移動時に、色々な団体の方とお話しでき、普段聞きたくでもわざわざ電話で聞くような内容でないことも質問でき、大変有意義でした。
- ・ 色々な団体の方と顔の見える交流の機会になり楽しく学べました。
- ・ 日頃、様々な会議体でお互いに顔は合わせるが、実際にどういった場所でどういった具体的な活動をしているか知らないことも多かったため、とても有意義であった。
- ・ 普段は業務中の関わりしかないため、あまり会話をする機会はありませんでした。そのため今回で様々な団体の方と話すことができ、大変良かったです。顔の見える関係づくりが重要。

- ・ 人材確保・育成を目指す研修

参加団体：連携協議会参加団体、北九州成年後見センター、病院、介護職員、就労支援団体 等

孤独・孤立に至っても支援を求める声を上げやすい社会を目指し、状況に合わせた切れ目のない相談支援につなげる体制の構築や、人と人とのつながりを実感できる地域づくりに向け、孤独・孤立対策に資する知識取得に向けた研修会を開催した。

表 3－5 人材確保・育成を目指す研修 1 日目プログラム

時間	プログラム
9：30～ 10：00	開会・オリエンテーション 北九州市より、研修会の趣旨説明、孤独・孤立に関する現状や北九州市の施策、孤独・孤立対策推進法の概略等について説明。
10：00～ 12：00	支援者側のメンタルヘルスについて（参加者数 20 名、アンケート回答者数 20 名） 講師：北九州市精神保健福祉センター 医師 宇佐美 貴士 氏 支援活動の質の維持・向上に欠かすことのできない支援者自身の心の健康について、予防の観点やバイオサイコソーシャルモデルでの対処法等について学んだ。
13：00～ 17：00	自分自身を見つめながら他社と楽しく関わる研修（参加者数 18 名、アンケート回答者数 18 名） 講師：株式会社ライズ キャリアコンサルタント 川島 よう子 氏 支援者がそれぞれの所属で持てる力を発揮するために大切にしているモノの考え方やブレない考え方の軸について、ゲームやグループワークを通して見つめなおした。

表 3－6 人材確保・育成を目指す研修 2 日目プログラム

時間	プログラム
8：50～ 9：00	開会・オリエンテーション 北九州市より、研修会の趣旨説明、孤独・孤立に関する現状や北九州市の施策、孤独・孤立対策推進法の概略等について説明。
9：00～ 10：30	居場所ってなんだろう？（参加者数 33 名、アンケート回答者数 28 名） 講師：北九州市立大学地域創生学群・基盤教育センター 教授 稲月 正 氏 孤独・孤立対策を考える上で最も重要なテーマの一つである「居場所」について、講師の体験談や国の孤独・孤立の実態調査の報告に基づき、孤独・孤立対策の必要性やこれからの居場所について考えた。
10：40～ 12：00	疑似体験を通して知ろう！知的障害・発達障害のこと（参加者数 25 名、アンケート回答者数 25 名） 講師：北九州市手をつなぐ育成会（親の会） 啓発キャラバンちゃちゃ隊 知的・発達障害を持つ方の特性について、当事者家族から疑似体験を通して普段の生活の中で感じていることや困っていることについて学んだ。できないことを知るのではなく、共に心が通い合える地域づくりについて考えるきっかけとなった。
13：00～ 14：00	誰もが安心して暮らせる支え合いの街づくりを目指して（参加者数 16 名、アンケート回答者数 15 名） 講師：北九州市社会福祉協議会 地域福祉部長 平野 謙太 氏 地域の困りごとに気付く力を高め、地域の困りごとを話し合い、住民主体の助け合いの共助の仕組みについて、体験談も交えながら学んだ。
14：10～ 16：40	孤独のない社会を創る！ビル一棟を心の拠り所となる居場所に再生（参加者数 21 名、アンケート回答者数 15 名） 講師：九州コ・ワーケーション推進コンソーシアム 小野 祐紀香 氏 福祉の分野外から起業家として孤独のない社会を創るために、「人とのゆるやかなつながりづくり」、「ソーシャルビジネス」の観点から講義。グループワークやワールドカフェの手法も取り入れながら、支援者同士の親睦も深まる最終講義となった。



●オリエンテーション



●講師講演の様子



●グループワーク実施



●グループごとの意見発表

図 3 - 5 人材確保・育成を目指す研修の様子

本研修が今後の実務の役に立つかについてアンケートを実施したところ、非常にそう思う、ややそう思うとの回答が太宗を占め、参加者全体として今後の実務に資する研修になったと感じられたことが伺える。

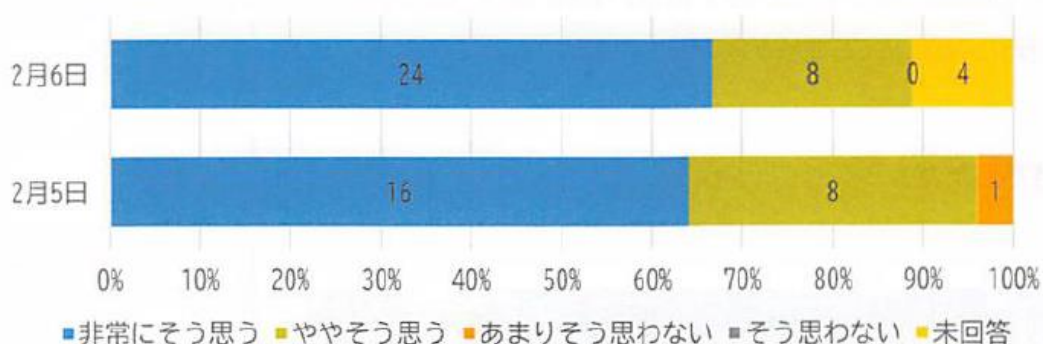


図 3 - 6 アンケート結果「研修内容は今後の実務に役立ちそうですか？」

参加者が今後の実務に役立ちそうと回答した理由として以下のような回答があった。

- ・ 気付きになるポイントが多く、自分事として考えることができた。
 - ・ 死にたいと言われたことが何度もあったが、自分の対応に自信が無かった。自分との対話を常に心がけたいと思った。
 - ・ 日頃後回しにしていたメンタルが崩れそうになった時の対処や自分のぶれない価値観は仕事を続ける上で常に意識しておきたいと思いました。
 - ・ 発達障害の方の感じ方について体験して、よくわかった。日常生活で取り入れてみようと思った。
 - ・ どの講師の説明もわかりやすく孤独孤立対策を住民に広げていくための知識が広がった。新たなつながりもできた。
 - ・ 疑似体験をさせてもらったことで、とても理解が深まりました。ありがとうございました。
-
- ・ 孤独・孤立に関する普及活動

孤独・孤立を感じている当事者やその家族が、孤独孤立に至っても支援を求める声を上げやすい社会とするための啓発動画を作成した。北九州市のウェブサイトや動画投稿サイト（YouTube）での配信を予定している。



図 3 - 7 啓発動画の一部

○ 移行した成果

北九州市としては、今年度の活動を通じて以下のような成果を得ることができ、孤独・孤立支援の輪を広げてもらえたと感じている。

- ・ ともすれば協議会に参加するだけの関係になりがちな参加団体間の関係を、バスツアー等を通じて相互に見える形にすることにより、参加団体のニーズを汲み取るとともに、要支援者に対し参加団体が協力して取り組める関係構築の第一歩とすることができた。
- ・ 支援者向け能力向上研修会においては、参加団体職員の相談能力向上はもとより、参加団体以外の職員等も参加できるようにすることで、参加団体以外の職員等の能力向上に寄与するとともに、将来的な連携協議会への参加のPRにもつながる活動となった。

社会福祉協議会においても、以下のようなメリットがあったと感じている。

- ・ 委託の形で行政と一緒に取り組んでいるという建付けを構築することで、参加団体と話を進めやすいという部分があった。
- ・ 参加団体の中には、これまで深く関わりきれてこなかった団体もあり、今年度の事業を通じて、連携が深まったと感じている。
- ・ 事務局として連携協議会の構成団体と顔を合わせることも増えたので、今後も声をかけやすく、孤独・孤立支援をよりやりやすくなった。

他方で、社会福祉協議会にとっては業務負担が増大する可能性があったが、孤独・孤立支援業務は、社会福祉協議会としてもこれまでも実施してきたため、新たに委託を受けたことがそれ程大きな業務負担とは感じず、受け皿として十分に機能を果たすことができた。

○ 今後の方向性

今年度の成果を踏まえ、来年度以降も同様の協働型の委託を進めることで、連携協議会の活動の活性化やそれに伴う北九州市域の孤独・孤立支援事業のさらなる充実を図っていく予定である。

来年度以降については、社会福祉協議会だけでなく、連携協議会に参加する他のNPO法人等の一部にも企画に参加してもらい、より幅広い知見や人脈を駆使した協働型委託とすることで、更なる質の向上を図っていくことを目指していく。

重要取組として位置付けた社会福祉協議会による企画・運営事業以外にも、前述した「北九州市版お悩みハンドブック」の機能改善やノベルティの配布のほか、「いのちをつなぐネットワーク推進会議」、「包括的な支援体制の構築に向けた支援者向け研修会」の事業も実施した。

【いのちをつなぐネットワーク推進会議】

参加者数：第一部 84 名、第二部 75 名

いのちをつなぐネットワーク推進会議構成団体：NPO 法人、公益法人、民間事業者、金融機関、買い物支援団体 等

行政、民間企業・団体等の連携のもと、支援を必要としている市民が社会的に孤立することのないように、地域全体で見守り、必要な行政サービス等につなげていくことを目的として、「北九州市いのちをつなぐネットワーク推進会議」を開催した。会員の活動状況報告や会員同士の情報交換、交流を深めるとともに、コロナ禍により顕在化した孤独・孤立の問題に対する正しい理解の促進を図るためのワークショップを実施した。

表 3-4 いのちをつなぐネットワーク推進会議 プログラム

時間	プログラム
第一部	いのちをつなぐネットワーク推進会議
13:30	いのちをつなぐネットワーク推進会議 開会
13:35	市長挨拶
13:40	感謝状贈呈式 ■登録 3 年目 企業・団体感謝状贈呈 代表受領：NPO 法人是空 ■登録 10 年目 企業・団体感謝状贈呈（40 企業・団体） 代表受領：株式会社ビッグベアーズフーズサービス
13:50	事例発表（各 10 分程度） ■北九州市立大学 大学生 ■買い物支援部会（合同会社 GOYO）
14:10	講演 演題：「認知症をもっと知ろう！」 講師：保健福祉局 認知症支援・介護予防センター 認知症地域支援推進員 中村 真理子 氏
第二部	いのちをつなぐネットワーク推進会議 ワークショップ
14:25	いのちをつなぐネットワーク推進会議 ワークショップ [主なテーマ] 社会的孤立をはじめとする地域課題に対してできること 全体ファシリテーター：三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 副主任研究員 丸川 正吾 氏
15:30	閉会



図 3 - 8 いのちをつなぐネットワーク推進会議の様子

【包括的な支援体制の構築に向けた支援者向け研修会】

参加者数：46 名

参加団体：北九州市孤独・孤立対策等連携協議会加盟団体、北九州成年後見センター、就労支援団体、食支援団体、行政 等

複雑化・複合化した困難を抱える人を支援するため、属性を問わない包括的な支援体制の構築を行うための研修会を実施した。有識者を招いた講演や、どの機関がどのようなアプローチで支援を行うことができるのか議論するグループワークを実施した。

表 3－5 包括的な支援体制の構築に向けた支援者向け研修会 プログラム

時間	プログラム
10：00	オリエンテーション
10：30	包括的な支援体制の構築と重層的支援 講師：同支社大学 永田教授
11：30	地域共生社会の実現に向けて～坂井市の取組から～ 講師：坂井市 斉藤主査
12：30	休憩
13：30	グループワーク～複雑化・復号化したケースについてケーススタディ～ 講師：同志社大学 永田教授
16：30	質疑応答
17：00	終了



図 3－9 研修会の様子

本研修が今後の実務の役に立つかについてアンケートを実施したところ（回答者 38 名）、非常にそう思う、ややそう思うとの回答が太宗を占め、参加者全体として今後の実務に資する研修になったと感じられていることが伺える。

今後の実務に役立ちそうですか

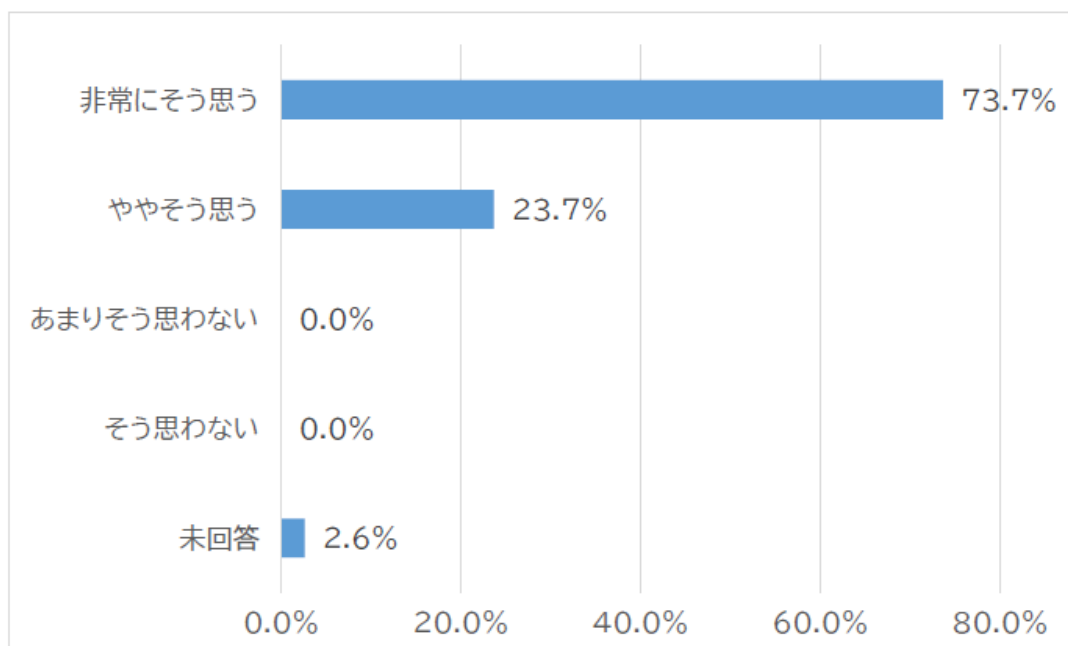


図3-10 アンケート結果「今後の実務に役立ちそうですか？」

参加者が今後の実務に役立ちそうと回答した理由として以下のような回答があった。他団体とのつながり、連携強化に資する研修となったことが伺える。

- ・ 各機関の方のお話が聞けた。顔の見える関係の第一歩になると感じた。
- ・ 他機関とつながることができたため
- ・ 関係機関がフランクに、それぞれの役割や支援内容を話せる内容で、それがまた今後の仕事に活かせると思ったため
- ・ 仲間がたくさんいると思うと一緒に頑張ろうという気持ちが強くなりました
- ・ 講義でシステムを理論的に知ったあとで（共通理解を得たあとで）、グループワークを通して温度のあるやり取りをすることで連携の重要性を実感できた。
- ・ 日常的な関わりはあまりない方（でも必要な方）とつながることができた
- ・ 他機関の方と連携していくため、学ぶ知ること、のりしろをもつことの大切さを学びました

3.3.4 次年度以降予定している取組

前述のとおり、今年度実施した連携協議会の事務局機能の試行的移行の成果を踏まえ、来年度以降も同様の協働型の委託を進めることで、参加団体のニーズを意識した事業の企画を行い、連携協議会の活動の活性化やそれに伴う北九州市域の孤独・孤立支援事業の更なる充実を図るとともに、連携協議会が自発的に自走していくための取組を推進する。

また、社会福祉協議会だけでなく、連携協議会に参加する他の NPO 法人等の一部にも企画に参加してもらい、より幅広い知見や人脈を駆使した協働型委託とすることで、更なる質の向上を図っていくことを目指していく。

5 月の「孤独・孤立対策強化月間」に合わせ、北九州市においては研修やバスツアー等の実施を検討しており、政府の取組とも歩調を合わせながら、孤独・孤立対策事業を強力に推進していく。

連携協議会の参加団体数については、既加入団体を含め、5 年後に 30 団体に増加させることを目指す。